

## 人を見た目で判断しないことの大切さ

宮崎県立富島高等学校 二年 那須<sup>なす</sup> 桃華<sup>もちか</sup>

私には、障がいのある祖母がいます。祖母は聴覚障がい、そして心因性失声という声が出ない二つの障がいがあります。この二つの障がいは見た目だけでは分からない障がいです。そのため買い物などに行った時、レジで「袋いりますか。」と聞かれても耳が聞こえないため、レジの人とコミュニケーションを取れず困っている所をよく目にします。

私が祖母の障がいを知ったのは小学四年生の時です。それまでは、障がいのことをあまり知らず、会話をする時にもノートでのやり取りだったので「なんでノートでやり取りするんだろう。」と聞いていました。また、ノートが無い時は母と手話でやり取りをしている時もありました。そして私も徐々に障がいのことを知り、祖母のために出来ることか否かと考えました。しかし、全く思いつかず今に至っています。

祖母は幼い頃から障がいがあり、いじめや差別を受けてきたと聞きました。例えば、「話しかけても反応がないから一人がいいんだよ。」と言われ、仲間はずれにされたこと等、いろいろなことを言われたりされたそうです。祖母の幼い頃は戦争が起きていた時期でただでさえ苦しいのに対して、障がいのある祖母は何も出来ないため生きづらかったと聞いて、私も胸が苦しくなりました。戦争が終結してからは、人権なども考えられ、障がいのある祖母も少しは生活しやすくなったと教えてもらいました。時代が進み、障がい者の人権も考えられていき、今では障がい者マークなども使用されるようになりました。祖母は障がい者マークを着けてはいませんが、ヘルプマークという周囲の助けが必要であることを表すマークを着けています。ずっと身に着けているわけではなく、買い物などの初対面の人と関わる時などに着けています。このようなマークがあったりしたおかげで祖母は生活しやすくなったと思います。

祖母は今年で八十歳になりました。この生きてきた八十年間で、障がいのある人の立場は大きく変わったと聞きました。初めは差別や偏見で立場があまり無かったが、時代が進むことに障がいのある人に対する考え方が見直されたおかげで、今では障がいのある人もそうでない人も平等に生活できていると思います。

そして私自身もきつ音という言葉が出ていくい症状があります。私の周りにはきつ音の人がいなくて、私一人がきつ音です。物心がつき始めた頃から症状がひどくなり、こんな自分が嫌だと思うようになり人前で話すことを避けていました。今は症状は落ちついていますが、まだ人前で話すことに抵抗があります。私にあるきつ音は障がいではないけれど、見た目だけでは分からないものです。きつ音のせいで小学生の頃はいじめや差別を受けたこともあります。先生が指名しよつとすると「桃華ちゃんを指名してください」などと言われ、バカにされたこともあります。先生も配慮をしてくれていたけれど、逆にその配慮が私自身を傷つけていたこともあります。今、きつ音は百人に一人が当てはまり、日本では百二十万人、世界では七千万人もいるというのに、認知度は二十パーセントと言われています。私の周りの人にも「きつ音って何?」と聞いてくる人もいます。

私と祖母は違う障がいや症状があるけれど、いじめや差別を受けた経験はお互い同じです。そのため同じ経験をしたからこそ、互いの気持ちに分かります。

今回、障がいのある人の人権について書いてみました。自分の身近な人に障がいがある人はあまりいないと思います。私は祖母を含めて三人の障がいのある人が身近にいます。幼い頃から身近に障がいのある人と関わってきました。そのおかげで今の自分がいると思っています。障がいのある人への偏見や差別は、まだまだたくさんあると思います。障がいのある人の人権を守るためには、偏見や差別をできるだけ無くすることが第一歩だと思います。もし、これからの生活で自分の周りに障がいのある人などがいたら、しっかり向き合っていけたらいいと思っています。

## 介護する側の人

聖心ウルスラ学園高等学校 三年 橋倉 成美

はしくら なるみ

最近「介護に疲れた」という理由で、妻を殺害した夫が逮捕されたという記事を目にすることがあった。この「介護に疲れた」という理由で家族を手にかけてしまうという事件を、この記事に限らず、目にするのが多くなっていると感じる。私は家族内で殺人が起こってしまうのは悲しいなと思う反面、介護をしてきた人の気持ちも少し分かるように思う。それは私自身介護の経験があるからだ。

先日、私の祖母は介護施設に入った。施設に入るまでは、家で車椅子生活をしていた。もともと持病がある祖母は私が幼い頃から入退院をくり返していたが、私が中学生くらいの頃からそのペースは早くなり、ここ数年は入院することが多くなった。しかし、一年くらい前から家に帰ってきて祖母の車椅子生活が始まった。初めの頃は自分で食事もとれていたし、トイレも一人で歩いており、時には車椅子から立って歩いていることもあった。しかし、施設に入る少し前からトイレから立ち上がれなくなったり、ベッドから立ち上がることも大変になったりした。そこで施設に頼ることを相談し、祖母も了解し、施設に入った。施設に入るまでの介護は本当に大変だった。母親は仕事中に呼び出されて家に帰ってトイレの介助をすることもあった。仕事から帰ってきて、すぐ祖母の介護を行い、その他の家事もあり、自分のことができるのは夜遅く、椅子で寝ていることも多かった。私は何もなくなっていいと言われていたが、母親がいなくて私は私にやれるしかないで数回トイレの介助をしたり、洗面の介助をしたりした。ベッドから起き上がらせられるにも一苦労だった。そもそも私は祖母と話すこともほとんどなく、顔も見ない日も多かったが、この時ばかりは祖母の細くなった腕や足を見て心が痛んだ。施設に入った時は悲しいより、安心の気持ちの方が強かった。

そんな経験があるからこそ、この介護疲れの事件には複雑な気持ちを抱いてしまう。私たち家族には施設を頼るといふゴールが見えていたのでまだ、気持ちが悪くはなかった。しかし、さまざまな事情で施設を頼ることができない人も多くいると思う。そして、自分がどんなに頑張っても先が見えず、そんなつもりはなくても事件を起こしてしまう。どうしたらこの問題は解決していくことができるのだろうか。私が思うに周りの人たちがもっと介護をしている人を理解して、よい環境をつくるのがこの問題を解決する方法だと思う。介護をする人は、時に仕事を辞めてまで家族だからと介護に励む人がいる。そんなとき周りが無関心で「そうなんだ」くらいで終わってはいけけない。声をかける、詳しい人は相談にのり情報を与えるなど、介護する人を一人にしない、させないようにする事が私たちにできる最も大切なことだと思う。

実際、私たちの周りには頼れる人がたくさんいて、ケアマネジャーの人や介護施設の人がたくさん助けてくれて、母親の職場の人もよく話を聞いてくれたそうだ。だから周りの環境というのは本当に大切だ。

よく私たちの議論の中で、介護される人の人権について問題提起されることは多いが、介護する側の人権についてはまだまだだと考える。「ヤングケアラー」や「老老介護」など問題はさまざまある。介護される側だけでなく介護する側にも人権がある。どちらも幸せであるように、その環境はもっと改善されるべきだ。家族だからといってその人だけで介護するのは本当に難しい事で、周りの協力がなければ悲しい事件はもっと増えることになるだろう。介護は綺麗事ではやっていくことができない。もっとたくさんの方が関心を向け、この問題は他人事ではないことを知っていくべきだと考える。私は介護というものを近くで見ると、実際に経験もした。もし周りで介護をして大変な思いをしている人に出会ったとき、いい環境をつくれる存在でありたい。

## 障がいのある人の人権

宮崎県立宮崎西高等学校 二年 六反田 要

何気なくテレビを見ていた時、五年以上前に起きた殺人事件についてのニュースが流れた。それは「相模原障害者施設殺傷事件」の加害者に死刑判決が出されたというものだった。聞き覚えのある事件だと思い、私はその事件について調べてみることにした。

二〇一六年、神奈川県知的障害者施設で起きた事件だった。施設の元職員が入所者十九人を刃物で殺害、また、職員・入所者二十六人に重軽傷を負わせた。加害者は「意思疎通のとれない障がい者は不幸で、不要な存在である。」「障がい者は安楽死させるべきだ」と主張し、言葉を話すことができない入所者を次々と刃物で刺していったそうだ。

私は本当に胸が痛んだ。なぜそんな差別的な主張ができるのか、なぜ障がいがあるだけで殺されなければならぬのか、施設で元々働いていたはずなのに、加害者はなぜこのような事件を起こしてしまったのか。疑問に思う点がいくつもあった。しかし、それと同時に中学生の頃、職場体験で行った障害者支援施設のとが頭に浮かんだ。

中学生二年生の時、職場体験として障害者支援施設に行かせてもらった。その施設では身体的な障がいがある人、知的障がいがある人などが生活をしたり、デイサービスを利用したりしていた。障がいの種類は人によって異なっていた。

施設に行つてすぐ、利用者さんたちが集まる食堂に向かった。私が自己紹介をすると、利用者さんは笑顔で話を聞いて、拍手をして喜んでくれた。その後、施設の職員の方が「利用者の方と話すときは大きな声でゆっくり話してね」と言って利用者さんが座るテーブルに案内してくれた。私が行ったテーブルには車椅子に乗った男性がいた。その男性は私に何か話そうとしていた。しかし、私は何を伝えようとしているのか分からなかった。もう一度お願いします、と尋ねるべきなのか戸惑っていると、その男性は車椅子にぶら下げてあった紙を私に見せてきた。

ひらがな表だった。文字を一つ一つ指差して、何か伝えようとしている。ゆっくりだが、私は男性が指さす文字を目で追っていった。「よ、ろ、し、く。し、ゆ、み、は、な、に？」と男性は言っていた。職員の方から言われたことを意識して質問に答えると、男性も自分の趣味だというゲームの話をしてくれた。

その時私は、気持ちを伝える方法は言葉を口から発するだけではないのだと強く感じた。知的障がい者は話すこと、意思疎通をすることは無理だろうと決めつけてしまっただけではないと感じた。

施設内には他にも言葉を話すことが難しい利用者さんがたくさんいたが、頷くなどのジェスチャーで気持ちを伝える方もいたし、手を握って笑顔を見せるだけの利用者さんもいた。それぞれ違う方法であっても私に何か伝えようとし、たとえ言葉が話せなくても、表情で嬉しいという気持ちを表現していたのだ。

利用者さんとの交流を通して、障がいのある人のことをしっかり理解し、相手が伝えようとしていることは何なのか考えることの大切さを感じた。いくら言葉を話すことができないからと言って、最初から障がいがある人の気持ちは理解できないと決めつけてはいけない。そして「相模原障害者施設殺傷事件」で犠牲になった被害者も苦しい思いをしながら亡くなっていったと考えると、このような事件が二度と起きてほしくないし、障がいがある人に対する差別や偏見も早くなくなっしてほしいと思った。

しかし現在、障がいがある人に対する差別は私たちが見えないところにまだたくさんある。障害者支援施設で、職員が利用者に対して暴力を振るったというニュースを最近目にし、公共施設を使う障がいがある人を邪魔もの扱いしたり、職場や学校で嫌がらせをしたりする人がいるのも事実である。また、障がいがある本人だけではなく、その家族に対する差別も問題になっているそうだ。

障がいがある人の家族に対し、「障がいがあるっていろいろ大変だね」「かわいそう」と言う人がいるらしい。気づかないうちに障がいがある方やその家族を下にみていないだろうか、また障がいがあることをかわいそうだと思ひ、障がいがあることが不幸だと思ひこんでいないか、無意識に相手を傷つけてはいないだろうか。

障がいがある人もそうでない人も同じ人間で、それぞれの考えをもち、対等な関係である。このことを忘れずに人との関わりを大切にしたいと感じた。まだまだ課題はたくさんあるが、少しでも障がいがある人に対する差別や偏見がなくなり、障がいがある方も自分の考えを発信でき、安心して暮らせる社会になってほしい。

## インクルーシブ社会を身近に

宮崎県立宮崎西高等学校 一年 有川 典諒  
ありかわ てんりょう

私は、中学三年生の時に、インクルーシブ社会について多くのことを学び、小論文を書きました。その中で、文化・国籍・性別・障がいなど多様性を認め合い、共に暮らしてゆくことが必要なのだと知りました。しかし、これは、概念のよつなものとして頭で理解しているだけで、実際にそのような状況を直視していない自分がいました。ところが、突然その状況を体感する時が来ました。

六月の半ば頃、高校の部活動の最中に大きな事故に遭いました。緊急手術が行われましたが、右手が動かない状態が続くことになりました。体の一部が不自由になり、それまでの生活は一変しました。学校生活では、文字が書けない、片手では靴紐が結べない、バッグのチャックを閉めることができない。掃除時間では、ほうきで掃くことができない。当たり前のようにできていた事が、自分ひとりでは、できなくなったのです。日常生活でも困難の連続でした。箸を持って食べることができない、靴下を履くことができない、ドライヤーで髪を乾かすことができないなど挙げればきりがありません。そして何よりも辛かったのは、自分だけができない、周りについていけないということでした。

途方に暮れていた自分に、同じクラスの仲間たちが自然とサポートをしてくれるようになりました。靴紐を結んでくれたり、荷物を運んでくれたり、黒板をタフレットで撮ってノート代わりに渡してくれたらしてくれました。中には、片腕であること、どんなことに困るのかを考えて、動いてくれる友達もできました。周りの人の支えによって、身体が不自由（言い過ぎかもしれませんが）でも、皆と同じような学校生活を送れることに気づいた瞬間でした。その時、私は中学生の時に学んだインクルーシブ社会の本質が分かった気がしました。

また、自分が工夫することによって困難を克服することもありました。例えば、文字を書く時は、文字を書く手と紙を添える手の両方を使わなければなりません。なぜなら、書く時にも、消しゴムを使って文字を消す時にも、紙を押さえる必要があるからです。そこで私は、その困難を身近なものを使って、解決できないだろうかと考えました。悩んだ末に思い浮かんだのが、中学生時代に書道の時間に使っていたぶんちゃんでした。実際に使ってみると、とても字を書くのが楽になり、消しゴムを使って文字を消すことも容易にできるようになりました。

この経験で、不自由な状態から、品物を使うことによって快適な生活に変えられるということを学びました。そこで、身体が不自由な人を助ける便利な品物がないかと思い、調べてみました。すると、障がいの状態に応じて生活を手助けする品物がたくさんありました。例えば、ボタンエイトです。これは、ボタン穴にさし、先にボタンを入れてから引っ張るようになっているので留めます。裁縫道具の糸通しを想像するといいかもしれません。ほかにも片手ばさみや片手爪切り、ドライヤースタンドなどがありました。

また、先ほどぶんちゃんのことを述べましたが、便利な品物を調べる中で、滑り止め下敷きという品物を見つけました。これは、特別支援学校などでも導入されている品物で、片手に障がいがあってもない人と同じように、字が書けるようにするための合理的配慮の提供の一例であることが分かりました。合理的配慮が適切になされることによって、障がいの有無に関係なく、ともに日常生活を営むことができるのだなと思いました。また、社会の中にある合理的配慮についても目を向けてみました。例えば、視覚障害者の方が役所に来た時には、職員が代読・代筆をしてコミュニケーションをとっています。ほかにも、イベント開催時に手話通訳者が配置されている会場も増えてきました。さらに、段差の小さい低床バスと呼ばれるバスがあり、下肢に障がいがあっても乗りやすいように配慮されています。今では当たり前となった路上の点字ブロックも合理的配慮の一環だと思います。

今回、自分のけがを通して、インクルーシブ社会の実現のためには、大きく二つのことが必要であると感じました。一つめは、何に困っていて、周りの人が何をすることによって、過いしやすくなるのかということを考えることです。私は、片腕となりできなくなったことを友達に話すと、周りの友達がたくさん手助けをしてくれました。二つめは、障がいの状態に応じた様々な自動具があり、それらの開発をさらに進め、発展させることです。障がいのある人が、活用できる道具が増えることで、自分らしく生活できると感じます。このような考え方を、全ての人が持つと、インクルーシブ社会の構築に繋がると感じます。